

## 「JENESYS2019」中国社会科学院青年研究者代表団第1陣 参加者の感想（抜粋）

○1週間の訪日中、日本の美しい景色に心引かれ、また日本の環境整備の取り組みとその成果に驚かされた。環境省のブリーフを通して、ゴミがあそこまで細かく分類できることを知り、東京、徳島の視察では、日本人が環境改善のために行っている努力を目の当たりにした。中国では対照的に、ゴミのリサイクルは極めて安い人件費で行われている。国民の生活レベルが上がっているため、あの方法ではいずれ立ち行かなくなるだろう。日本が行っている方法が、今後の中国にとって唯一の道なのかもしれない。

一般市民であれ、大学教授であれ、日本では誰もが環境に対して「責任がある」と口にする。『菊と刀』を読んだ私は、これこそ日本の伝統文化の一部なのだ知っている。伝統文化は、現代の問題解決にも力を発揮するのだ。中国文化の研究もしている私にとって、この理解は中国に対する自信にもつながった。

また、2名の教授による講義では、環境に配慮した経済について学問的に説明していただいた。早稲田大学 赤尾教授の講義では、持続可能で環境に配慮した経済に欠かすことのできないものは何かを学んだ。徳島大学 眞弓教授の講義では、環境に対して責任ある経済を実現することの利点について学んだ。お二人の話はどちらも奥深い分かりやすく、経済学が専門ではない私でも大いに啓発された。

○日本のゴミ処理場の視察が印象に残っている。中央防波堤埋立処分場は長年積み重ねた技術があり、企業も廃棄物の種類により異なる技術を持っており、政府による支援のもと、それぞれ東京都で出たゴミを処理していた。家庭から社会全体の環境保護事業にいたるまで、「Reduce（リデュース）、Reuse（リユース）、Recycle（リサイクル）」の3Rの考えが日本社会には浸透している。一般ゴミの分類もとても細かく、国民が自覚的に生活ゴミを処理するという習慣が既に形成されている。学校教育にも環境保護の理念やゴミの分別方法が組み込まれており、学習やささまざまな実践を通じて、国民のエコ意識を育んでいる。

徳島県上勝町で見た「葉っぱビジネス」は印象的だった。上勝町の株式会社いろどりは、高齢者の生産者を集めて自然資源である葉っぱを商品化して、地元住民の収入の問題を解決しただけでなく、葉っぱを町の美しい“名刺”に変えた。他の国と同様、日本の高齢化問題は、事業の継承・発展を抑圧する潜在的な要因となっている。少子高齢化がもたらす社会問題は、全力で取り組まねばならない課題であるのは明らかだ。

○1週間にわたり日本を巡り、交流したことで、日本の社会や文化に対する認識が深まった。渡航前から日本文化の体験やネット上の友人からの情報で、ある程度の理解はあったが、自分の足で訪れてみて、この魅力溢れる国をより深く知ることができた。日本の社会の秩序や平穏さ、精緻さが印象に残っている。ここで、いくつか代表的な例を挙げて、訪日の感想を語りたい。ホテルでシャワーを浴びるとき、客室清掃員がシャワーヘッドを壁のほうに向けてくれていることに気づいた。お湯を出したとき、宿泊客にかからないためだ。日本のサービス業はこのような細かな心配りが完璧で、その顧客のことを考えた心遣いは、まさに日本が生産やサービスにおいて追求しているものの姿であり、とても感動した。

もう一つ印象深かったのは、各業界で社会的に正しい行いをするよう務めていることだ。J&T 環境株式会社、大塚製薬株式会社はいずれも、企業の社会的責任に基づき、環境保護対策を実施していると強調していた。早稲田大学 赤尾教授も講義の際、社会の一員として自主的に資源の無駄遣いを減らすこ

とは、制度で縛るだけではない、もう一つの社会の持続可能な発展を支える重要な要素であると強調した。人の行いというものが、日本社会が持続可能な発展を推し進める中で、大事な役割を果たしている。それは外的要因で縛られることと同じだ。確かなモチベーションとして、中国も文明的な生態系の建設において、国民の行いを正し、育てていくべきだ。

○今回の訪問で最も印象に残っているのは、東京スーパーエコタウンを訪問したことだ。まる1日を使った視察では、数名の担当者がわかりやすく解説してくれ、辛抱強くこちらの質問に答えてくれたことで、多くの知識を得ることができた。また、東京湾の中央防波堤埋立処分場の視察では、もっと驚いた。東アジア、ひいては世界の最先端レベルのゴミ処理工程は、先進技術をもとに、綿密な計画と、繰り返し積み重ねてきた経験と長年の継続の上でできたものであり、その成果を中国や世界のエコロジー従事者は真剣に学んだほうがいい。

近年、中国政府、ソーシャルメディア、各業界の従事者、一般市民の環境問題に対する関心は高まり続けている。ゴミの回収・処理といった業務を含む環境保護の取り組みも進んでおり、それは大都市・北京に暮らす私も身をもって感じているところだ。しかし、目を向けるべきは、中国のゴミ処理方法には、技術力の後れ、リサイクル率の低さ、ゴミ分類の不徹底（一般ゴミの分類が適当であること、清掃作業員のいい加減な作業）、ゴミ処理業者の健康被害と自然環境の破壊といった問題を孕んでいることだ。2018年、中国政府は海外からの資源ゴミの輸入禁止策を施行したが、国内ゴミの回収・再利用に関する問題は解決できていないと同時に、東アジア地域の環境保護に新たな課題をもたらしている。中央防波堤埋立処分場の長年の経験は、東アジアおよび世界全体の生態文明建設にとって非常に重要なことで、参考になると思う。

○今回の訪問で、日本の科学技術、法律制度、社会、国民性に対して理解がより深まった。

先ず、日本は教育を重視しており、政府、家庭、個人とも教育に多額の経費や力を注いでいる。これは日本の科学者から何人もノーベル賞受賞者が生まれている大きな理由であり、日本の科学技術の進歩に確かな基礎を築いている。同様に、中国政府や中国の家庭も教育を重視しており、一歩ずつ進歩は遂げている。例えば、中国でも近年、ノーベル賞を受けた科学者がおり、国際社会から認められた。

次に、日本は法制度が整っており、社会も効率的に管理されている。環境保護関連の制度を例に挙げよう。日本政府や各界の人士は1960~1970年代から既に、環境と調和のとれた経済発展の重要性を認識していた。そして日本は、法律や条令を定めて生態系や環境の保護を進め、発展が持続可能な経済を促進し、良好な成果を収めた。これは世界の国、とりわけ発展途上国にとって良い手本だ。